第16回
「いつもありがとう」
作文コンクール入賞作品集
2022

〈選者〉あさのあつこ／森田正光／小島奈津子／山﨑正毅／清田 哲

シナネンホールディングスグループのこと知っているかな？

皆さんの身近なところで活躍しています！

「いつもありがとう」作文コンクールを主催しているシナネンホールディングスグループのこと、みなさんはどんな会社か知っていますか？

実は、みなさんの住まいや暮らしのなかで役立っていたり、社会を支えたりしています。その製品や事業について紹介します。

「いつもありがとう」作文コンクール主催企業

シナネンホールディングスグループ

シナネンホールディングス　ミライフ西日本　ミライフ　ミライフ東日本
日高都市ガス　シナネン　シナネンサイクル　シナネンモビリティPLUS
シナネンエコワーク　シナネンゼオミック　ミノス　タカラビルメン
インデス　シナネンファシリティーズ

シナネンホールディングス株式会社
本社：東京都港区三田三丁目5番27号 住友不動産三田ツインビル西館6階

SINANEN

ありがとう作文　検索

第16回「いつもありがとう」作文コンクール入賞作品集（2022）　もくじ

先生方のお言葉 ……3
あさの　あつこ（作家）
森田　正光（気象予報士）
小島　奈津子（フリーアナウンサー）
山﨑　正毅（シナネンホールディングス株式会社）
清田　哲（朝日小学生新聞）

最優秀賞
お母さんの口ぐせ　千葉　隼大……4

シナネン賞
とととのひかるあしあと　藤本　千尋……6

ミライフ賞
大きな手　米島　夏綾……8

朝日小学生新聞賞
ありがとうの気持ちを伝えたい　野入　桃子……10

優秀賞
〈低学年の部3編〉
せなかのり　延與　侑一良……12
なかよしのひけつ　新開　和心……14
おり目正しく　能美　にな……16

〈高学年の部3編〉
自まんのしょく人じいちゃん　秋本　蒼空……18
ぼくとママの歩み　田中　幸……20
音がなくても　奥野　颯揮……22

団体賞（6団体）
【福島県】会津若松市立小金井小学校
【茨城県】神栖市立大野原小学校
【愛知県】扶桑町立扶桑東小学校
【兵庫県】明石市立清水小学校
【広島県】福山市立金江小学校
【福岡県】志免町立志免中央小学校

主催：シナネンホールディングスグループ
　　朝日学生新聞社
後援：文部科学省　朝日新聞社
●応募総数一一、三八八作品の中から選ばれました。

先生方のお言葉

あさの　あつこ　【作家】

今年も、たくさんの「ありがとう」に触れられて、幸せな気持ちになれました。書き手のみなさんのまっすぐな気持ちや優しさ、ユーモアを感じ笑ったり、涙ぐんだりと心が震えました。みんなもすてきですが、みんなの作品に出てくる大人たちも本当にすてきです。

自分の周りにいる大人たちの一生懸命に生きている姿を理解し、大切にし、誇りにしているみんなに心からの拍手を送りたいです。私自身も元気をもらいました。みんな、ありがとう。

森田　正光　【気象予報士】

「ありがとう」は、一番身近な人に伝える事から始まって、多くの人への感謝へと広がっていきます。

今回の入賞候補作品の中、お母さんへの「ありがとう」が10編。そして次に多かったのが祖父への6編でした。孫を持つ身としては、この祖父への感謝が私自身への「ありがとう」のようにも聞こえました。

また今回は、ストーリー性に加え、場面が浮かぶ表現にも感心しました。

特に低学年の作品は素直な表現に心が温まりました。

小島　奈津子　【フリーアナウンサー】

コロナ禍三年目。皆、不安な気持ちをどこかに抱えながら生活してきたと思います。家族だけでドライブや公園に行ったり、入学式が夏になってしまったり、長いこと会えていない祖父母から宅配便が届くなど、作品からたくさんの「今」が見えてきました。苦しいけれどそこからしっかり学んでくれている皆さんを見て感激しています。皆さんの周りには素敵な背中を見せて下さる、素敵な言葉をかけて下さる大人が見守ってくれていますね。その「ありがとう」を共有できるように、表現してくれた皆さんに感謝致します。

山﨑　正毅　【シナネンホールディングス株式会社】

小学生の皆さんの作品には、読み手である大人の日頃の何気ない行動の一つ一つに、子ども達は我々が思っている以上の感受性を持って反応し、自分の家族への愛情と感謝の気持ちがあるのだという事を、改めて感じさせてもらうと共に、すがすがしい気持ちにさせてくれる力があります。小学生の皆さんの心温まる作品を通じて、日頃から自分自身に関わる人への感謝の気持ちを持つことの大切さを改めて教えていただける、そんな気持ちになります。

毎年、全国から本当に素敵な言葉の贈りものをありがとうございます。

私からも皆さんに「ありがとう」の気持ちを贈りたいと思います。

清田　哲　【朝日小学生新聞】

今回も作品を通してたくさんの「ありがとう」に出合うことができました。一言に「ありがとう」といっても、改めていろいろな意味があるのだなと感じました。私も周りの人たちに大きな声で「ありがとう」と自信を持って、声をかけたくなりました。一生懸命書いたみんなに心の金メダルを贈りたいと思います。

（順不同　敬称略）

最優秀賞

お母さんの口ぐせ

東京都　暁星小学校 四年
千葉 隼大

「早く早く」がお母さんの口ぐせだ。朝起きる時も学校に行く時も「早く早く」。言われるたびに、ぼくは「今やろうと思ってたのに」と心の中でつぶやいて、わざとのろのろする。お母さんは「早く早く！」ともっと大きな声で言う。けさも超せかされて、学童に行く時カギを忘れてしまった。お母さんに何度も電話したけど出ない。しかたないからおむかえを待っていたら、最後の一人になってしまった。お母さんは記者の仕事をしていて、いつも忙しそうだ。家に帰っても、しかめっつらで新聞やニュースを見てパソコンをパチパチたたいている。お父さんが死んじゃってから、「早く早く」は二倍か三倍にふえた気がする。

ぼくが楽しみにしていた夏休みの沖縄旅行でもお母さんは「早く早く」を連発していた。行きたかった「アブチラガマ」に入る時も「早く早く」。おおぜいの日本兵や住民の命をすくった糸数ごう。ガイドのとう山さんはお母さんより二十才くらい上の女性だったけれど、かい中電灯片手にまっ暗なごうの中をぐんぐん進んでいく。お母さんは、とう山さんを質問ぜめにしている。ゆっくり聞きたいのに。はしょう風やのう症にかかったかん者がおくにねかされて、ごはんも水ももらえなかった話、ひめゆりの女学生がけん命にかんごした話、どれもすごかったけれど、ぼくが感動したのは日本兵の日比野さんの話だ。はしょう風にかかって死にかかっていた時、ばく風でぐう然井戸のそばに吹きとばされた。そして、重しょうの仲間達の「水をくれ」という声にこたえて水を運んでいるうちに元気になって命が助かったという。とう山さんが「人のためにがんばっていると、神様が長生きさせてくれるんですね」と話していた。ごうを出ると、さとうきび畑の横でお母さんがとう山さんに言った。「じゃあ、とう山さんもきっと長生きされますね。」とう山さんはちょっとはずかしそうに、でもうれしそうに笑った。お母さんも笑った。つられてぼくも笑った。

お母さんはもうすぐウクライナに取材に行く。本物の戦場だ。お母さんは毎ばん本を読んでくれている。昨日は「せんそうしない」という本だった。「こどもとこどもはせんそうしない　けんかはするけれど　せんそうしない」そうだよな。こどもは戦争しないのに、大人はどうしてするんだろう。お母さんはその答えを見つけに行くんだと言った。ぼくはすごく心配になって、お母さんの手にあごをのせた。お母さんはもう片方の手でぼくの頭をたくさんワシワシなでてくれた。あったかかった。お母さんの作るおべん当みたいだ。

もう少し大きくなったら、ぼくも答えを探しに行きたい。今度はぼくが「早く早く」ってせかすんだ。想ぞうしてニヤリと笑った。お母さんが「ニヤニヤしてないで早くねなさい！」っていつものしかめっつらになった。でもそんなお母さんがぼくは大好きだ。てれくさいけど、いつかこっそり伝えようと思う。

評価のポイント　大好きなお母さんへの思いがストレートに表現され、読んだ人の心を穏やかにしてくれる素敵な作品です。満場一致で最優秀賞に決まりました。

シナネン賞

ととのひかるあしあと

愛知県　名古屋市立八事東小学校　一年
藤本 千尋

「かみ、そろそろだしてくださいって。」
「あ、そうだっけ。」
ととはとってもわすれんぼう。パンをかいにいってわすれ、ゆうびんをだすのをわすれ、ばあばのたんじょうびやわたしとのやくそくをわすれ。まい日1かいは、ぜったいなにかをわすれます。そして、いつもてきとうに「だってわすれちゃうんだもん。」とわらって、ちっともなおそうとしませんでした。でも、そんなととが、さいきんかわってきたことに、わたしはきづいてしまいました。
まず、わすれものたいさく。がっこうからもらってきたプリントをしゃしんにとって、よるとあさにもちものをチェックします。そして「きょうはこれをもっていく日だよ。」とまい日いってくれるようになりました。つぎに、やくそくわすれたいさく。やくそくしたらすぐスマホのカレンダーにかいて、なんかいもみたり、アラームをならしたりするようになりました。それからわすれたときのこと。なにかわすれると、ぺっこりあたまをさげて、ちゃんと

「ごめんね。」とあやまってくれるようになりました。どうしてきゅうにかわったんだろう？かかにきいてみたら、
「小がくせいになったちいちゃんの、おて本にならなきゃとおもったんじゃない？」
といっていました。わたしはしんぱいになりました。きゅうにがんばりすぎて、ととがつかれたらかわいそうだとおもったからです。でもかかにそれをいったら、わらっていわれました。
「だいじょうぶ。ほら。」
かかがゆびをさしたほうをみると、ろうかのでんきがつけっぱなしになっていました。けしにでると、そのさきのおふろばも、わたしのへやも、なんとトイレまででんきがついています。ととだ。あるいたところのでんきをぜんぶけしわすれて、あしあとみたいにひからせていました。なあんだ、わたしのこといがいはもとのととのままだった。ホッとしたら、なんだかおかしくなってきてわたしはわらってしまいました。それから、わたしのためだったらすごくがんばれるととのことが、もっともっとすきになりました。
とと、わすれないようにするのがにがてなのに、わたしのためにがんばってくれてありがとう。ととのひかりのあしあとは、わたしがたどって、けしておいてあげるね。がんばるととも、そのままのととも、ずっと、とってもだいすきだよ。

評価のポイント
「そのままのとともだいすきだよ」と優しく語りかける締めくくりに心を打たれました。「ひかるあしあと」など、表現力も優れています。

ミライフ賞

大きな手

埼玉県　春日部市立備後小学校　五年
米島　夏綾

学校から家に帰る時、小さな公園の横を通る。公園から明るい声が聞こえてくる。声のする方に目を向けると、小さな子がお母さんと楽しそうに遊んでいた。元気だな、とほほえましく思いながら自分の手を見る。そこには、いつの間にか大きくなった手があった。

新型コロナウイルスの感染拡大のせいで、放課後や休日に友達と遊ぶ機会は減っていた。学校に行く以外はほとんど家にいた私を見て、ある日お父さんとお母さんは一緒に公園に行かない、と言ってくれた。少しはずかしい気持ちもあったが、外で遊びたかった私はすぐに支度をした。家から近い公園なのにすごくうれしかった。小学校に入学する前に三人でよく来ていた久しぶりの公園は、昔と何も変わっていなかった。しかし、遊んでいる内に何かおかしいと思い始める。すべり台ってこんなに小さかったかな、ブランコのすわる木の板ってこんなにせまかったかな。私は久しぶりに来たからそう思うだけだと考え遊び続けた。体をあまり動かしていなかったのは、お父さんもお母さんも同じ様で、しばらくするとベンチにすわり休んでいた。二人の話している声が聞こえてくる。

「三人でここに来るのは何年ぶりだろう。少し前まで毎日の様に来ていたのにね。また、三人で遊びに来る事はあるのかな。」

いつからだろう。友達としか公園で遊ばなくなったのは。いつだったのだろう。最後に三人で公園で遊んだのは。そう考えると、私のむねはなぜか熱くなった。

公園からの帰り道、久しぶりに外で遊べた私はすっかりつかれていた。そんな私に気が付いたお母さんが昔みたいに手をつないでくれた。そのしゅん間、私はおどろいた。お母さんの手はいつの間に小さくなってしまったのだろう。

「あら。ずい分手が大きくなったのね。」

その一声で私は気が付いた。すべり台やブランコ、そしてお母さんの手が小さくなったのではない。私の体が、手が大きくなっていただけだと。

私がコロナにかかった時、泣いて謝る私に謝る必要なんてないよ、と言いながら優しくだきしめてくれたお母さん。よし、今日からしばらく家の中でキャンプだな、と笑いながら本当にテントの用意をし始めたお父さん。どれだけつかれていても、どれだけ大変な事があっても、いつも笑っているお父さんとお母さんが大好きです。お父さん、お母さん、本当にありがとう。まだまだ子供の私だけど、少しは大きくなれたかな。また三人で公園に遊びに行こうね。

重いランドセルと戦いながらも、ようやく家に着く。すぐに百点を取ったテストをお母さんに見せる。お母さんは、よくがんばったね、と優しく頭をなでてくれた。小さくなったけど、大きいままの手で。

評価のポイント　何気ない日常の体験が丁寧に描かれており、公園で遊ぶ三人の姿が目に浮かびます。「手」に着目して進むストーリーはまるで映画を見ているようです。

朝日小学生新聞賞

ありがとうの気持ちを伝えたい

福岡県　明治学園小学校 四年
野入 桃子

学校から帰ると、私はその日にあった出来事を母に話す。母は私の話を笑ったり怒ったり困ったりしながら聞いてくれる。そして、話の最後に必ず笑顔でこう言うのだ。

「学校生活を楽しんでね。」

母は二才の時に家が火事になって大火傷を負った。病院に入院して何度も手術を受けたそうだ。当然、学校に行けるはずがない。病院の中にある学校と書かれた部屋に通っていた。病院内の学校は、病気やけがで入院している子ども達が学習をする場所だ。時間割りはなくて、それぞれが出来る時間で出来る課題に取り組む。母は火傷で手が動かなかったので、えんぴつが持てなかった。だから本ばかり読んでいたそうだ。顔も焼けていたのに、母の目が見えなくなっていなくて良かった。もう過去のことかもしれないけれど、私は神様に感謝している。もしも母が死んでしまっていたら、私は母に会うことが出来なかったのだから。それよりも、そもそも私という人間も存在しなかったのだ。

当時、母はその見た目で心無い言葉をたくさん浴びた。いっぱい泣いて、「こんな思いをするくらいなら火事の日に死んでしまえば良かった」と何度も思ったのだそうだ。大変な思いをした母は、命の大切さを知っている。思いやりも知っている。「助けてもらった命には意味があるはず」そう気がついた母は、勉強とリハビリを続けて看護師になった。子どもの時に自分が助けてもらった分、今度は困っている人を助けたかったのだそうだ。

母は私に「宿題しなさい」とは言うけれど、「勉強しなさい」とは言わない。学校、友達、ほかにもたくさん、普段の生活からいろいろな経験をして学んでほしいと言うのだ。確かに人の気持ちを思いやることや、今ある状況を判断して動くことは、教科書にはのっていない。そして、これらは教えてもらって身につくことじゃない。経験から考えて、自分で学びとっていくものなのだ。

夢を見た。私のクラスに転校生として、小さい頃の母がやって来るのだ。母の顔と手は包帯でぐるぐる巻き。クラスのみんながざわつくけれど、私はそんなこと気にしない。母が幼い頃に思い描いたように、普通に学校に通って普通に友達として遊ぶのだ。包帯で母の顔を見ることは出来ないけれど、母が笑っているのが私にははっきりとわかるだろう。

母の生い立ちを聞いて、私は自分が恵まれていたことに気がついた。学校にいけること、友達と遊べること、ご飯を食べられること、安心して眠れること。当たり前と思っていたことが、本当は当たり前じゃなかった。普通と言われるそれは、とても幸せなことだったのだ。私に関わる全ての人へありがとうの気持ちを伝えたい。そして母へこう言いたい。

「私のお母さんでいてくれて、ありがとう。」

評価のポイント

「当たり前と思っていたことが、本当は当たり前じゃなかった」という言葉に考えさせられました。大人・子ども関わらず多くの人に読んでほしい作品です。

優秀賞〈低学年の部〉

せなかのり

和歌山県　智辯学園和歌山小学校　一年
延與（えんよ）　侑一良（ゆういちろう）

しゅうぎょうしきのひに、いえでおひるごはんをたべていたら、せいちゃんが、
「ぼくのなつやすみのおてつだいは、にわのみずやりとげんかんのくつならべね。」
といいました。おかあさんは、
「せいちゃんはきちょうめんだから、ぴったり。」
といいました。ぼくは、「ぼくにぴったりのおてつだいはなにかな？」とおもいました。
ぼくはせが小（ちい）さいので、せんたくものをほしたりとりこんだりできません。ちからもよわいので、おふとんをほせません。
ごみぶくろは、ひきずってやぶけました。
おべんとうとおりょうりはつくりかたがわかりません。おさらあらいはきかいがします。
ぼくは、せいりせいとんがにがてなので、おそうじやおかたづけはむりです。
おかいものは、おかしのことしかわかりません。
みずやりは、せいちゃんがします。
せんたくものをたたむのとおふろそうじはたまにだったらいいけど、まいにちはいやだ。
おかあさんは、

「ゆうちゃんはことしはじめてだから、おかあさんがよろこぶことでもいいよ。」
といいました。
だからぼくは、おかあさんがよろこぶことにしました。ぼくのなつやすみのおてつだいは、せなかのりです。せなかのりは、ぼくがおかあさんにいつもやってあげるマッサージです。ぼくがせなかのりをすると、おかあさんは「きもちいいー。」とよろこびます。せなかのりができるのは、かぞくでぼくだけです。おかあさんは、ぼくのからだのおもさがちょうどいいといいます。だから、せなかのりはぼくにぴったりのおしごとです。
おかあさんは、
「ゆうちゃん、わるいけど、せんたくきがピーッピーッっていうまでおねがいね。」
といいます。ぼくは、おかあさんのせなかにあおむけにねて、ゆらゆらゆらーとからだをゆらします。ゆらゆらをはやくしたり、おそくしたりします。おかあさんは、
「ああ、きもちいい。つかれがふきとぶー。」
といいます。
ぼくは、おかあさんのせなかのうえで、はなしをしたり、ほんをよんだり、テレビをみたり、いろいろします。ぼくは、せんたくきのピーピーがなってもせなかのりをつづけます。おかあさんは、ときどきねむっています。おかあさんは、まいにちいえのおしごとや、ぼくたちのせわでつかれているから、ねてていいよ。おかあさん、いつまでもげんきでいてね。おかあさん、いつもありがとう。

優秀賞　〈低学年の部〉

なかよしのひけつ

鹿児島県　鹿児島市立東谷山小学校　一年

新開（しんかい）　和心（わこ）

わたしのいえでは、たまにあることをします。それは、よるのどらいぶです。

「きょう、どらいぶいく？」

しごとからはやくかえってきたおとうさんがきくと、

「いきたい、いきたい。」

と、わたしと、おねえちゃんと、おかあさんがこたえます。おふろとごはんをいそいですませます。よるだから、しずかにくるまにのりこんで、さっそくしゅっぱつです。

わたしは、よるのどらいぶがだいすきです。りゆうのひとつは、ひるとはちがうよるのけしきがみれるからです。よるのがっこうをとおると、いつもはひとがいっぱいいて、あかるいがっこうが、まっくらで、だれもいなくて、しずかにみえます。まるでねむっているみたいです。うみのちかくをとおると、いつもはきらきらげんきにひかっている、うみや、さくらじまが、つきのひかりにてらされて、ぼやあっとやさしくみえます。やまのうえにのぼると、いえのでんきがいっぱいひかっていて、だいやみたいにきれいです。まどから、よるのけしきをみるのが、わたしはすきです。

ほかにも、よるのどらいぶがすきなりゆうがあります。それは、かぞくがなかよくなれるからです。どらいぶをしているといろいろなはなしをします。がっこうのことや、しごとのことや、たまに、わたしたちがちいさかったころのはなしもします。

「このみちなつかしいなあ。」

と、おかあさんがいいます。わたしと、おねえちゃんがあかちゃんのときも、よるにないていたときは、どらいぶでねかせていたそうです。

それに、からおけもします。おおきなこえで、くるまからながれるきょくをみんなでうたうと、きもちがすっきりします。

「あああ。」

と、おとうさんが、たかいこえでさけぶと、みんながけらけらわらいます。みんながわらうと、わたしはうれしくて、げんきになります。あしたもがんばろうというきもちになります。

たのしいことをかんがえて、わらわせてくれるおとうさん、なんでもはなしをきいて、まもってくれるおかあさん、わたしのために、しゅくだいをはやくすませて、あそんでくれるおねえちゃん、いつもそばにいてくれてありがとう。

わたしのかぞくは、なかよしです。なかよしのひけつは、よるのどらいぶだとおもいます。だから、きょうもはやくかえってきてね、おとうさん。

優秀賞〈低学年の部〉

おり目正しく

福岡県　明治学園小学校 三年
能美 にな

母がしんけんな顔をしてわたしの制服をみつめている。それから持ち上げてベルトを外し、何度も首をかしげながらぎこちない手つきでプリーツを合わせ洗たくばさみで止める。位置が決まると満足そうに大きくうなずき、ていねいにアイロンをかけ始める。

母は家事が苦手だ。小さいころからお手つだいすら泣いていやがったという。祖母がなだめすかしてやっとできるようになったのは、ギョーザつつみだけ。一人ぐらしを始めた時は冷ややっこばかり食べていたそうだ。ある日、とんかつがどうしても食べたくてちょうせんしたものの、あわや火事。それ以来母は決してあげ物をしない。洗たくきがいっぱいになってからしか洗たくしないし、時々見かけるわたぼこりにいたっては「同居している」と言いはり、名残おしそうなえんぎをしてから、気まずそうにそうじする。いつも家の中で何かをさがしており、先日テレビのリモコンは冷とうこで「発くつ」された。

そんな母が毎日仕事から帰った後、汗だくでアイロンをかけている。かわいいプリーツスカートの制服は三十年前に母が着ていたものと同じデザインだ。新がたコロナウイルスのせいでおくれてしまった入学式。その時着ていたのはこの夏の制服だった。ところがやっと小学校生活が始まってわずか三日で、わたしはスカートの一番目立つところに穴をあけた。工作の時にはさみで切ってしまったのだ。はじめての書道の時間につけてしまったぼく汁のしみなど、わたしの制服はおせじにもきれいだとは言えない。しかし母は毎ばん、大切そうにその制服にアイロンをかけている。どんなに仕事がおそくなった日にも、つかれてぐったりしながら帰ってきた日にも、アイロンがけだけはかかさない。

アイロンのかかっていない制服を着ていく日がある。母がとまりの仕事でいない時だ。もちろんこまることはない。しかし、なんとも言えない不思ぎな物足りなさがあった。不安なような気合が入らないような、そわそわたよりない気持ち。次の日、いつものようにきっちりとおり目のついた制服を着たとき、自然にせすじがのびた。大丈夫、いつもの自分らしくいればいいという自信にあふれる気持ち。いつも当たり前に着ていたこの制服は、こんなにも自分の気持ちをささえてくれていたんだと初めて気がついた。

家事が苦手な母が毎日汗だくでかけてくれるアイロン。これは母からわたしへの、無言のエールだ。新型コロナのせいで不きそくな学校生活の中、ぴしっとおり目のついた制服を着て、今日もわたしは「おり目正しく」一日をおくれるよう気持ちを引きしめる。

学校から帰ったら、家事はきょう力するね。

お母さん、いつもありがとう。

「行ってきます。」

優秀賞〈高学年の部〉

自まんのしょく人じいちゃん

埼玉県　さいたま市立大牧小学校　四年
秋本　蒼空

ぼくのおじいちゃんは鉄工所を経営している。社員はおじいちゃんだけだ。昔はひいおじいちゃんとぼくのお父さんも一緒に働いていたが、ひいおじいちゃんは亡くなり、お父さんは違う会社にしゅうしょくした。おじいちゃんが一人で工場を守っている。工場はぼくの家のとなりにある。

おじいちゃんの朝は早い。6時になると工場の周りをそうじ。ぼくは、ほうきをはく音で目をさます。7時には、けんこうのためにさん歩。8時にはシッターがあき仕事が始まる。とっても元気なおじいちゃんだ。

今はぼくも学校があるので、おじいちゃんの仕事を見ることはへってしまったが小さいころはよく見ていた。

暑い中、火花をちらしてようせつをしたり大きな音を立てて、ハンマーで鉄をたたいているおじいちゃんのすがたはとてもかっこいい。ぼくには何なのかよく分からないが、ものすごい大きな鉄の作品を一人で作り上げる。ぼくのうちに遊びにきた友達は、大てい言う。

「すごい音。うるさいね。」

でもぼくはうまれた時からこの音の中で生活しているのでうるさいとは感じない。工場から鉄をたたく大きな音が聞こえると、今日もおじいちゃん、元気だな、と安心する。おじいちゃんが病気になり入院していたときは、静まりかえった工場がとてもさびしかった。

おじいちゃんは、ぼくが学校から帰ると、必ず工場から

「おかえり。」

と声をかけてくれる。ぼくが出かける時は、

「どこいくんだい、気をつけて。」

と言ってくれる。じゅくや習い事の送りむかえもしてくれる。ぼくの家のとなりには仕事をしているおじいちゃんがいつでもいる。ぼくやお姉ちゃんのことを気にして、毎日のように顔を出してくれる。だからお母さんが仕事でいなくてもさみしくない。

おじいちゃんはよっぱらうと、

「大きくなったらじじと鉄工所で働くか。」

とぼくに言う。ぼくは、

「えーやだー。」

と答えるけど、本当は少しなやんでいる。ぼくはおじいちゃんもおじいちゃんの工場も大すきだからなくなってほしくない。おじいちゃんはあと何年働けるか分からないとよく言うけれど、ぼくはまだまだおじいちゃんには、工場で仕事をしていてほしいと思っている。

いつも近くでぼくたちを見守ってくれているおじいちゃん、どうもありがとう。ぼくはまだしょう来の夢はきまっていないけど、ぼくのゆめが決まるまで、工場を守っていてね。

優秀賞〈高学年の部〉

ぼくとママの歩み

群馬県　みどり市立笠懸北小学校　五年
田中　幸

ぼくとママは同い年、十一才だ。ぼくが産まれて、ママはママになった。だから、ぼくのたん生日はママのたん生日でもある。

ぼくは最近、ママとよくケンカをする。えらそうな事を言って、ママをよく怒らせる。ママは、「一丁前になったね！」と笑う。でも、ママもママで「幸の時は全然考えられなかった。」と言ってるくらい、妹二人には良い意味で適当に子育てをしている。ママもどうやら一丁前になったらしい。

ぼくが産まれて、ママはママになった。まだ何も子育てなんてわからないママ〇才。ただただ真面目な新米ママ。ママは母乳が思うようにでなくて、「母乳で育てられないなんて母親失格だ…」って、毎日自分をせめてなやんだ。ママ一才。ぼくに何かある度におろおろしっぱなし。ぼくがたん生日に発熱、そして肺炎で入院した。

「もっと早く気づいてあげられてたら…」って、ママはまた自分をせめてなやんだ。

ママ二才。周りの子とぼくを比べてばかり。ぼくが思ったよりしゃべり始めるのがおそくて、「私がもっといろいろと経験させてれば…」って、ママはまたまた自分をせめてなやんだ。ママはママになってからずっと自分をせめてなやんで過ごしている。なんだか、可哀想だ。ママは母乳が出なくてなやんだことから、今は栄養バランスのとれた食事を作ってくれる。肺炎で入院してなやんだことから、体調をくずしそうな様子をいち早く見抜いて対しょしてくれる。ぼくの成長でなやんだことから、ぼくの興味・関心に合わせていろいろなことを体験させてくれる。ママはぼくを通して、ママの経験を積んでいたんだね。

ママ十一才。もう一丁前、ちょっとのことでは動じないかんろくまで出てきた。この間、塾がないことを忘れていて、ぼくは塾の前でむかえに来るのを二時間待った。二時間後、ママがむかえに来た。車にかけよって、塾がなかったことを伝えると、ママの顔が真っ青になった。ぼくに何もなかったかと聞く声やぼくをだきしめる手が震えていた。ママは、「幸にもしものことがあったら…って―今、ここに幸がいることだけがもう…」と泣き出した。

この十一年間ですっかり一丁前になったはずだったのに、ぼくのことになるとまだまだ新米のままだったんだね。ぼくが生まれたしゅん間から、ママはぼくにずっとずっと愛を注いでくれてたんだね。顔を見て直接言うのはちょっとはずかしいけど…本当にありがとう。これからもずっとずっといっしょに歩んでいこうね。

優秀賞〈高学年の部〉

音がなくても

鹿児島県　知名町立下平川小学校　六年
奥野　颯揮

「・・・。」

ぼくはじいちゃんへ「ありがとう」の感謝の気持ちを伝えた。

ぼくのじいちゃんは聴覚障がい者だ。母はいつもじいちゃんと話すときは手話を使ってくれている。

じいちゃんは、ぼくや妹に勉強を教えてくれる。紙に公式を書いたり、歌を歌ってくれたりしてくれる。音が聞こえなくてしゃべりにくそうだけど、歌ってくれる。

食事にも連れて行ってくれる。じいちゃんがメニューを見せて料理に指をさす。注文するときや店員さんに話すときは、ぼくの担当だ。だけど、そんなことは気にならない。いつも食事に連れて行ってもらってすごく感謝している。

「この料理、おいしい」と、じいちゃんに伝えたいとき、母から手話を教えてもらって伝える。口の動きも大事だから、分かりやすく口を動かす。じいちゃんは口の動きでも会話の内容が分かるんだ。

じいちゃんはもともと耳が聞こえた。でも小学生のときに木登りをしていたら落ちてしまって、そのときから耳が聞こえなくなったみたいだ。つらかったという話も聞いた。もしぼくが、耳が聞こえなくなったら、ぼくの大好きな歌が聞けなくなって、かなりつらい気持ちになるだろう。あきらめなければならないものもでてくると思う。

ぼくはじいちゃんの住んでいる沖永良部島に、幼いときに引っ越してきた。ぼくはそれまで障がいをもっている人との交流がほとんどなかった。だから、最初はじいちゃんとの会話ができなくてとまどった。手話ができる母を通しての会話だったから、じいちゃんと直接話がしたかった。だけど、じいちゃんと会う時間が増えていくなかで、少しずつ手話を覚えたり、口や身振り手振りを工夫したりして思いを伝えられるようになった。

ぼくは、じいちゃんとの時間を通して、人間にはいろんな生き方があるんだということを受け入れることができるようになった。人を大切にしたいと思った。こんな考えをもてるようになったのも、じいちゃんのおかげだ。感謝したい。

じいちゃんに日頃の感謝の気持ちを伝えた。手話はなんだか照れくさかったので、口を大きく動かして「ありがとう」と伝えた。じいちゃんは、最初は驚いていたけれど、喜んでいる様子だった。じいちゃんは照れているみたいで、作っていたたこ焼きを早く作るようにせかしていた。そんなじいちゃんの姿を見て、ぼくもうれしくなった。

音では伝えられないけど、ぼくとじいちゃんはつながることができる。

これからもじいちゃんに届けたい。

音のない「ありがとう」を。